

目次／表紙 テーマ展「岩手の絶滅危惧種とネイチャーポジティブ」／  
p. 2-3 いわて文化ノート「旧石器時代利用の石器石材 ～岩手の黒  
曜石と頁岩～」／p. 4-5 展覧会案内 テーマ展「岩手の絶滅危惧種  
とネイチャーポジティブ」／p. 6 事業報告「第14回 岩手県立博物  
館まつり」／事業報告「歴史特別講座／トピック展「忘れられたケモ  
ノたち 旧農林省毛皮獣養殖所と滝沢村の近代」／p. 7 事業報告「『ア  
ンサンブルこずかた』クリスマスコンサート」／トピック展「緊急企画！  
ツキノワグマってどんな動物？」／p. 8 インフォメーション

## テーマ展

# 「岩手の絶滅危惧種とネイチャーポジティブ」

令和8年3月28日(土)～5月24日(日)

場所：2階 オザワ工業ぎゃらリー(特別展示室)



写真：ゴマシジミ（岩手県レッドリスト絶滅危惧1類）

失われつつある岩手の生物多様性の現状と、自然を回復させる「ネイチャー  
ポジティブ」に向けた活動を紹介합니다。

■いわて文化ノート

# 旧石器時代利用の石器石材 ～岩手の黒曜石と頁岩～

考古部門 主任専門学芸員 米田 寛

■はじめに

石には引き込まれるような魅力があります。特に光沢を帯びた岩石や鉱物は、その美しさから2万年以上に暮らしていた旧石器時代人にも珍重されました。

その代表的な石材が黒曜石で、東北地方には旧石器人が利用した黒曜石産地がいくつもあります。長さ10cm以上の石器を作り出せる青森県深浦産と秋田県男鹿半島産は好んで利用され、東北北部の中では豊富な流通量を誇っていました。漆黒色で透明度の低い宮城県湯の倉産は2万年前の尖頭器石器群に利用されています。また、山形県月山産も有名です。

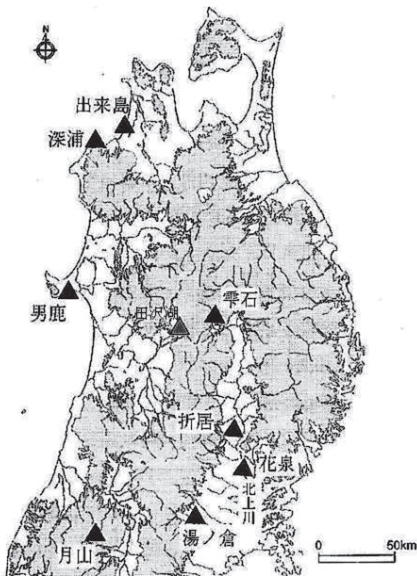


図1. 東北地方の主な黒曜石産地

■岩手の黒曜石

黒曜石は岩手県でも採取が可能で、いくつかの産地がありますが、150万～120万年前に古北上川の流路に沿って形成された地層から見つかります。給源（1次原産地）は岩手山系と考えられていますが、岩手山の地下400mまで掘削したボーリング調査で黒曜石が見つかったこともあり、人類が採取困難な深さに埋没していると推定されます。その代わりに、古北上川の流路に沿って形成さ

れた礫層内から転石として見つかった場所（2次原産地）が複数あり、雫石町小赤沢、奥州市折居、一関市花泉町金沢が知られています。川の流路沿いということ、現在の川岸に有りそうなイメージかもしれませんが、花泉では標高70m以上の丘の上に黒曜石包含層があります。これらは北上川流域産黒曜石と呼ばれています。



図2. 奥州市折居産黒曜石

北上川流域産黒曜石の転石サイズは北上川を下るにしたがって小さくなる傾向があります。製作する石器の大きさは転石のサイズに規制されますので、転石サイズが小さければ小さいほど、小さな石器しか作れません。後期旧石器時代の石器の多くは、一旦長めの石刃や縦長剥片を作り、それを素材とします。狩猟具だと、その細部を加工して尖頭器やナイフ形石器に仕上げますが、縄文時代の代表的狩猟具である石鏃と比べると大型の素材が必要となり、製作時の石材ロスが大きいのです。北上川流域産黒曜石は入手可能な原石の長さが10cm未満であることが多く、長めの素材を取得するには不向きです。そのためか北上川流域産黒曜石製石器は旧石器時代の奥州市下嵐江Ⅰ遺跡・下嵐江Ⅱ遺跡でわずか2点の剥片利用が確認されているのみです。

それが縄文時代になると、北上川流域産黒曜石で小型石鏃を大量に製作するようになります。狩猟での弓矢普及によっ

て、石鏃の需要と小型黒曜石の供給のバランスが取れたのでしょう。

■岩手の頁岩

狩猟具によく利用される石材の中に頁岩があります。頁岩は原石を敲くと薄く剥がれる性質を持つことからこの名称が付けられていますが、元々は軟質な泥岩や凝灰岩で、海だった場所に泥や灰が沈殿してできた岩石でした。それがさらに地中での圧力により固結し、薄くパリパリと割れるようになったものです。

どこにでもありそうな石ですが、旧石器時代の狩猟具を作る「丁度良い硬さ」のものは少なく、県内でも良質産地は偏在しています。代表的産地は、久慈市山形町沼袋の黒色頁岩、雫石町志戸前川上流の大地沢産頁岩、西和賀町南本内川支流草井沢・水無沢地区の頁岩、奥州市若柳地区の頁岩の4カ所が確認されており、産地近傍には旧石器時代遺跡も見つかっています。



図3. 雫石町大地沢産頁岩・珪質頁岩 (当館岩石園展示中)



図4. 西和賀町水無沢の頁岩

### ■石材産地と旧石器集団の移動

これらの産地情報は、遊動生活を営んでいた旧石器人の移動ルートにある程度推定する研究材料となります。旧石器人たちが遊動生活の中で石材産地へ立ち寄れるようスケジュールを組んでいたと考えられるからです。遺跡から出土する石材種と石器の形状を手掛かりに移動ルートを想定してみましょう。

良質石材は道具や石核の形で携行し、徐々に消費されますが、次の石材産地でまた道具や石核を補充するため、最初の出発点となった遺跡から最も長い距離を旅してきた産地の道具や石核がメンテナンスや消費によって小型化していきます。

モデルケースとして、久慈市早坂平遺跡第Ⅰ文化層で出土した石器石材は、遺跡近傍の黒色頁岩、青森県深浦産黒曜石、秋田県米代川流域で採取可能な濃茶褐色頁岩が利用されていますが、近傍の黒色頁岩製石器は外皮付き・大型で、深浦産黒曜石と米代川流域産頁岩は僅かに外皮が残るものの小型です。このことから早坂平遺跡にいた旧石器人の採石旅行は、久慈地域を起点としたとき、まずは西へ向かい狩猟を行いながら米代川流域まで到達して頁岩を獲得し、その後深浦産黒曜石を入手したと考えられます。そして各石材の消費状況と、各石材の出土数量及び石器の形状（自然面が残っているか、何度もメンテナンスして小さくなっていると考えられる形状か）などを

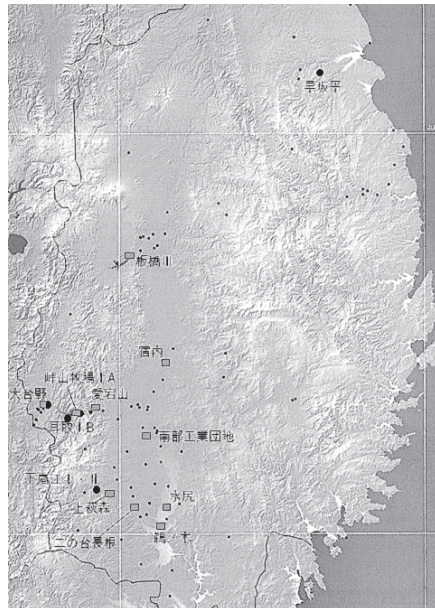


図6. 岩手県内の主な旧石器時代遺跡  
(やや大きめの□が前半期の遺跡)

考慮すると、早坂平遺跡の次に滞在する米代川流域では、沼袋産黒色頁岩が消費された形状で見つかり、米代川流域産頁岩が新規に補充・獲得されますので、その頁岩は外皮付きであることが多いこととなります。この消費と補充の繰り返しによって各遺跡に消費過程の異なる石器が残されると考えるのです。

西和賀町峠山牧場Ⅰ遺跡A地区でも豊富な近傍の草井沢・水無沢産頁岩を利用しながら、深浦産と男鹿半島産黒曜石も利用しています。このことから、遊動経路としては西和賀町域から秋田県域へ向かい、現在海岸線となっている平野部を北上して深浦まで移動し、また西和賀に戻ってくるルートが想定可能です。

あくまでモデルではありますが、これらの事例からは、岩手県域に暮らした旧石器人たちが東北南部や関東との往來のような長距離の南北移動よりも、太



図7. 良質頁岩産地と旧石器人の想定遊動ルート(楕円範囲が頁岩産地)

平洋側から日本海側へと東西に動くことが多い傾向が読み取れます。

### ■気候と動物と人

東北北部の旧石器人が東西に移動することは、良質石材産地の分布からも合理的な行動と考えられますが、気候と動物の行動も影響している可能性があります。

最終氷期最寒冷期の東北北部は、亜寒帯針葉樹の森に覆われていましたが、細かく見ていくと日本海側で亜寒帯針葉樹林主体となり、太平洋側では針葉樹疎林や草原が発達したと考えられています。この気候の差は、100~200km程度の比較的近距离で草地の繁茂のタイミングが異なる複数の好地に辿り着けることを意味します。新鮮な草地を求めて移動するバイソンやシカなどの群れをつくる植物食動物にとっては暮らしやすい環境でしょう。気候差と動物の行動を予測して狩りの成功を目論む東北北部の旧石器人にとっても、環境差のある地域を跨いで行動する動物を追いながら東西に移動することは合理的であったと考えられるのです。

(主任専門学芸員 米田 寛)



図5. 産地と石材消費の関係

## ■展覧会案内

# 岩手の絶滅危惧種とネイチャーポジティブ

会期：令和8年3月28日（土）～5月24日（日） 会場：オザワ工業ぎゃらりー（特別展示室）

### ■はじめに

岩手は自然が豊かといわれていますが、それは本当でしょうか。確かに森林面積は広く、本州一の広さがあります。しかし、そこにいた生き物たちは、以前と変わらず、そこにいるのでしょうか。

2025年に「いわてレッドデータブック」が更新されました。これは、県内で絶滅が心配されている生き物たちの解説書です。これを見ると、残念ながら多くの生き物たちが危機にさらされ、すでに一部は失われている現状がはっきりとわかります。そこで、本展覧会では、岩手の生き物たちが迎えている危機を皆さんにお伝えします。ただし、失われつつある自然をただ嘆くものではありません。減少を押しとどめ、回復させるための取り組みである「ネイチャーポジティブ」を紹介し、岩手の自然を次世代に繋ぐために何が必要なのかを考えていきます。



図1 ヤマキチョウ  
更新されたいわてレッドデータブックでは  
絶滅したと判断された

### ■第1章「生物多様性とは」

——まずは知ることから

「自然が豊か」とはどういうことでしょうか。山菜などの「自然の恵み」がまず浮かびますが、生活に必要な木材、食料を育む農地の土壌や水質なども、様々な生き物がもたらす恩恵です。私たちが普段の暮らしを続けられるのは、生物多様性が保たれているからこそです。ネイチャーポジティブは、こうした私たちの生活を支える基盤である生物多様性を回

復させることを目指す取り組みです。

ところで「生物多様性」とはなんでしょうか。展覧会の第1章では、岩手にすむチョウを通して、生物多様性とは何かを解説します。

高い山、人の暮らす里山、水辺——環境が違えば、そこに住むチョウの種類も変わります。これが「生態系の多様性」です。また、同じ種類のチョウでも、模様や大きさが少しずつ違います。これは育った環境の違いもありますが、人間一人ひとりの顔が違うように、チョウたちもそれぞれ異なる遺伝子を持っているためでもあります。この「遺伝的多様性」が、環境が変化したときに生き残るための大切な力になります。生物多様性とは、単にたくさんの種類がいるということではありません。様々な環境があること、それぞれ異なる種類の生物が生息していること、そして同じ種類でも遺伝子が異なること。この3つの視点から、岩手の自然の豊かさを感じ取っていただければと思います。



図2 ベニヒカゲの多様性  
山地ごとに異なる特徴が見られる

### ■第2章「岩手の生物多様性の現状」

——直視すべき現実

ここでは、岩手の自然に迫る危機を紹介します。

山と森のコーナーでは、イヌワシが直面している危機をお伝えします。翼を広げれば2メートルにもなるこの大きな鳥は、明るい草原や里山で狩りをしていました。しかし、森林管理の変化によって

過密な森が増え、狩りができる場所が失われています。岩手県内約30つがいの繁殖成功率は、ここ5年で約5%にまで激減し、2024年には巣立った雛は1羽もいませんでした。



図3 イヌワシ

ここで皆さんに考えていただきたいのは、地球温暖化対策とネイチャーポジティブという「二つの正義」の衝突です。脱炭素のための再生可能エネルギー施設も、生物多様性の保全も、どちらも人類の存続に欠かせません。しかし、効率的なエネルギーを求める開発と、希少な生物に残された生息域が、岩手の北上山地で同じ場所を取り合っているのです。これらをどのように両立させたらよいのでしょうか。展覧会では、イヌワシの生息域と開発可能地域を分けるゾーニングの重要性を紹介します。

里地里山のコーナーでは、人の手による管理が途絶えたことで起きる変化と、逆に近代的な管理によって起きる変化、両方の側面から生態系への影響をご紹介します。定期的な草刈りや放牧が行われ



図4 ダイコクコガネ  
かつて県内に多く生息したが、  
放牧の変化などにより激減した。

なくなると、明るかった草地は藪になり、明るい環境を好む植物や生き物が姿を消します。一方、効率化を求めた圃場整備や農薬の使用は、田園環境に適応してきた生き物たちを減少させています。

水辺のコーナーでは、カワシンジュガイを取り上げます。100年以上も生きるこの貝の繁殖には、実はヤマメの存在が不可欠です。幼生は一定期間ヤマメの鰓に寄生しなければ成長できないのですが、堰堤やダムによる河川の分断がヤマメの遡上を阻み、貝の次世代が育つ機会を奪っています。親貝だけが残る「高齢化・絶滅待ち」の集団——これは、生態系のつながりがいかに大切かを物語っています。



図5 カワシンジュガイ  
河川の分断により繁殖が困難な集団がある

### ■第3章「岩手のネイチャーポジティブ」 ——実現に向けて

ここまで厳しい現実をお伝えしてきましたが、この状況を変える可能性があるのが、新しい世界目標であるネイチャーポジティブです。この中では、環境保全を「人間が生き残るための基盤を再生させる生存戦略」と位置づけ、「これ以上自然を減らさないように」という受け身の姿勢から、「自然をどう増やしていくか」という積極的で具体的な活動へと大きく転換されました。2030年までに自然を2020年より豊かにし、2050年までには自然の再生力を完全に回復させる——これが世界共通の目標です。

岩手県内でも、陸と海の30%を保全地域にする「30by30」の取り組みが始まっています。県内では5か所が「自然共生サイト」として登録され、企業、地域の協議会、個人など、様々な担い手による保全活動が展開されています。また、以前からの保全活動も継続して行われています。例えば、金ケ崎町では地域住民と行政・企業が協働してマツムシソウの保全に取り組み、成果を上げています。こうした活動が、自然を回復させる上で重要な役割を果たしています。第3章では、こうした岩手での実践例をご紹介します。

### ■第4章「岩手の自然を次世代に繋ぐ」 ——あなたも担い手の一人

最後の章では、ネイチャーポジティブが実現した未来の岩手で、自然の回復がどのように行われるのかをご紹介します。水害防止の河川改修工事に合わせて魚道を設置する、企業が地域住民と協力して自然再生の管理を続ける、市民がカワシンジュガイの稚貝を発見して専門家と協働する——こうした場面は、決して夢物語ではなく、実現可能な未来です。

このような未来を迎えるために欠かせないのは、自然の現状を観察し、記録することです。そのためには専門家だけでなく、多くの人たちの協力が必要です。「いわてレッドデータブック」を更新する調査の基盤となったのも、多くのナチュラリストたちによって継続されてきた観察記録でした。

第4章では、岩手の自然を記録してきた先人たちの調査ノートもご覧いただけます。数十年にわたって記録を続けてきたナチュラリストたちの情熱は、今、高齢化によって引き継ぎの時を迎えています。記録が途切れるということは、自然の異変に気づく「目」が失われることを意味します。皆さんの日常の気づき、スマホの一枚が、未来の自然を守る新しい

「目」になります。何をどうやって調べたらよいか、自然を測るための「ものさし」のアイデアもいくつかご紹介します。例えば、サケが川をさかのぼれる距離を測ることで、川のつながりの回復度を知ることができます。



図6 野外調査ノート

### ■皆さんへのメッセージ

この展覧会は、岩手の自然の危機を訴えるだけのものではありません。現状を正しく知り、回復の可能性を信じ、そして一人ひとりが行動することで未来は変えられる——そのことを、皆さんと一緒に確認したいと思います。会場を後にされる時、「自分も何かできる」という気持ちを持ち帰っていただけたら、それが私たちにとって最大の喜びです。

(生物部門 渡辺修二)

関連事業（詳しくはインフォメーション欄をご覧ください）

#### ■展示解説会

3/29 (日)、4/18 (土)、  
5/3 (日祝)  
各回とも13:30~14:30

#### ■関連講座

4/12、4/26、5/10の「県博日曜講座」は生物部門学芸員が展覧会に関連する話題をご紹介します。  
各回とも13:30~15:00

#### ■自然観察会

5/16 (土) 9:30~12:00  
要事前申し込み

## ■事業報告

## 第14回 岩手県立博物館まつり

日時：令和7年10月12日（日）・13日（月・祝）

令和7年10月12日（日）・13日（月・祝）の2日間、「第14回 岩手県立博物館まつり」（以下、博物館まつりと表記）を開催しました。この博物館まつりは、幼児・児童を中心として、広く一般の方々に博物館をより身近に感じてもらうことを目的とした事業です。

今回の博物館まつりでは次の内容を実施しました。①松ぼっくりを使ったフクロウの置き物作り。②プラスチック粘土



と化石の型を使った化石のレプリカ作り。③ペットボトルとスライムを使ったスライム時計作り。④触察資料の設置やカラフルな組み紐作りなどを実施した体験学習室（たのしい！あそびとまなび）。⑤当館の岩石園・植物園の探検。⑥化石のレプリカを探しながら博物館を探検する企画（博物館にかくされた化石をさがせ！）。⑦当館の芝生広場での遊具貸し出し（けんぱく！わんぱく！広場）。

⑧「盛岡チアダンスクラブ煌」によるダンスパフォーマンス。⑨テーマ展「いわての酒造り」展示解説会。⑩クイズを解きながら博物館を探検する企画（チャレンジ！はくぶつかん）。このほか飲食コーナーとして、ファーム仁王、凛花が出店しました。

岩手県立大学のボランティアサークル「どろんこ隊☆」にご協力いただくなど、多くの方のご支援をいただき、無事に2日間の事業を終えることができました。初日は雨に見舞われましたが、2日間合計1782人ものお来館者を数えました。ご来館くださった皆様に心より感謝申し上げますとともに、またのご来館を心よりお待ちしております。

（普及課 大銃地駿佑）

## ■事業報告

## 歴史特別講座／トピック展

## 「忘れられたケモノたち 旧農林省毛皮獣養殖所と滝沢村の近代」

皆さんは、昭和10年代、現在の滝沢市に、タヌキやキツネを養殖・研究する施設があったということをご存知でしょうか。当館では今年度、この、「旧農林省毛皮獣（モウヒジユウ）養殖所」について紹介しました。

きっかけは昨年度、同養殖所をはじめ、全国にあった毛皮獣の養殖施設について文献やフィールドワークにより研究を進めている上智大学の北條勝貴教授（ほうじょうかつたか）から、同施設の紹介を受けたことでした。筆者自身この施設の存在を全く知らず強く興味を持ち、イベントの企画や、北條氏の所蔵資料を展示することで協力させていただきました。

北條氏の研究は、岩手県内の他の研究者の関心を集め、岩手県立大学の平井勇介准教授、同大学院博士後期課程の今野

ただあき公顕さんらも研究に参加し現地調査、聞き取りなどを進めてきました。それらの成果を発表する場として、10月4日（土）には3氏による講演、10月19日（日）には現地見学会を開催し、多くの方に参加いただきました。また、10月4日から、北條氏所蔵の資料に加え、当館所蔵の毛皮のマフラーや近代岩手県の絵図、養殖所があった場所に現在ある滝沢森林公園・野鳥観察の森ネイチャーセンターの施設及び所蔵資料の紹介などを加え、トピック展を開催しました（トピック展は3月まで開催予定）。

イベントや展示は、メディアにも取り上げられ、盛り上がりました。そしてそれだけで終わらず、関連する資料をお持ちの一般の方々から情報を頂いたり、かつて養殖所に住んでいた方に聞き取りを

して新たな情報を手に入れたり、新たな共同研究者を得て研究や遺構の保存が進んだり、リアルタイムで進む歴史学研究を広く公開する機会となりました。

今後も、同施設に係る情報や資料の収集に努めるほか、地域や他組織、施設と連携して活動していきたいと考えています。ぜひ皆さんからも、引き続き情報をお寄せください。

（歴史部門 工藤健）



## ■事業報告

## 「アンサンブルこずかた」クリスマスコンサート

日時：令和7年12月13日（土）13：30～ 会場：岩手県立博物館 講堂

当館では、幼児や児童を含めて誰でも気軽に音楽等に親しむことができる機会を提供することを目的とし、平成28年度からミュージアムコンサートを実施しております。今年度は「アンサンブルこずかた」を迎え、クリスマスコンサートとして当館地階の講堂で開催しました。

アンサンブルこずかたは、平成6年3月に有志で結成され、現在は、毎週土曜日の午前中、主に盛岡市中央公民館の音楽室で活動しています。施設訪問や各種イベント、地域のお祭りなどで演奏することもあり、多くの方々に親しまれている地元のバンドで、毎年3月には1年間の活動の集大成として定期演奏会を市内で開催しています。

当日、開場は午後1時でしたが、正午

過ぎから来館者が徐々に増え、開場10分前には講堂入口に長蛇の列ができる盛況ぶりです。開場して間もなく満席になりました。今回は2部構成のコンサートで、第1部は10曲、第2部は8曲、アンコールにお応えして2曲の計20曲の楽曲が演奏されました。クリスマス定番の「Jingle Bells」にはじまり、60年代にヒットした「MAS QUE NADA」「白い渚のブルース」「SOUL BOSSA NOVA」など懐かしい楽曲が会場を包みました。ボーカルの熊谷絵美さんが「北ウィング」など計7曲を唄い、その透き通るような美しい歌声に来場者の皆さんは感動されている様子でした。曲と曲の間には演奏者の紹介や活動実績、演奏曲のエピソードなどを面白く紹介し、会場からは和やかな笑

いが起こっていました。アンコール曲「人生の扉」は、コンサートの締めくりに相応しい名曲で、来場者の皆さんは大変満足しておられました。

ご協力いただいたアンケートでも「ぜひ来年もお願いしたい」「毎年開催してほしい」など多数の定期公演を望む声を頂戴したほどでした。次年度以降も当事業は継続してまいりますので、どうぞご期待ください。

（普及課 久保賢治）



## ■トピック展

## 緊急企画！ツキノワグマってどんな動物？

会期：令和7年11月7日～令和8年3月31日（予定）

令和7年の晩夏から初冬にかけて、特に東北地方では多くのツキノワグマが人里に出没し、不幸な人的被害が多く発生しました。岩手県内でも連日のようにクマ出没のニュースが流れ、盛岡市の中心街でも何度も確認されました。この異常な大量出没は、彼らが主食とするブナの実やドングリが大凶作で山林に食べ物がほとんど無いことが主な原因とされています。空腹に困ったクマたちは栗や柿、時には人用の食料品を求めて人里に居つくようになり、人と不幸な出会いをしてしまいました。結果的に多くのクマが駆除されて命を落としました。

そもそもツキノワグマはどんな動物なのでしょうか。社会問題となった彼らの実態を県民のみなさんに正しく知っていただきたいため、緊急企画のトピック展

を開催しました。生きたツキノワグマは動物園などで安全に観察していただきたいですが、細部を間近でじっくりと鑑賞できるのは、良質な剥製を多数所蔵している当館の強みです。今回は産まれたばかりの乳児と成長段階の異なる幼獣たち、そして成獣と比較用に北海道のヒグマも展示しました。また、剥製は資料保存のために触ることを禁じていますが、



今回は特別に触ってもいい成獣の剥製1体も追加で展示しました。ツキノワグマの大きさや顔の形態をヒグマと見比べたり、意外と柔らかい毛並みや硬く鋭い手足の爪などを実際に触ってみたりして、ツキノワグマの実際の姿を正しく理解していただけたら幸いです。

（生物部門 高橋雅雄）



# 岩手県立博物館

IWATE PREFECTURAL MUSEUM

## インフォメーション

〈令和8年3月1日～令和8年6月30日〉

### お知らせ

●国際博物館の日記念 入館無料の日  
国際博物館の日にちなみ、5月17日(日)の入館料を無料とします。

### 展覧会

- テーマ展「石を愉しむ展覧会」  
令和8年1月10日(土)～3月8日(日)  
会場：2階・オザワ工業ギャラリー(特別展示室)  
石(岩石・鉱物)が持つ様々な魅力を愉しむ展覧会です。色鮮やかな石や岩絵具で描かれた日本画などを展示します。
- テーマ展「岩手の絶滅危惧種とネイチャーポジティブ」  
令和8年3月28日(土)～5月24日(日)  
会場：2階・オザワ工業ギャラリー(特別展示室)  
失われつつある岩手の生物多様性の現状と、自然を回復させる「ネイチャーポジティブ」に向けた活動を紹介しします。
- 展示解説会 要入館料(高校生以下無料)  
3月29日(日)、4月18日(土)、5月3日(日)各回13:30～14:30
- 企画展「すこやかであるためにー円環する生・老・病・死ー」  
令和8年6月20日(土)～8月16日(日)  
会場：2階・オザワ工業ギャラリー(特別展示室)  
厳しい生活環境のなかで、岩手の人々がいかに生命と向き合ってきたかを概観します。
- 展示解説会 要入館料(高校生以下無料)  
8月1日(土)、8月7日(金) 各回とも14:30～15:30
- 関連日曜講座  
6月28日「出土品に見る死生観(仮)」  
講師：井上雅孝氏(滝沢市埋蔵文化財センター)

### 県博日曜講座

- 第2・第4日曜日 13:30～15:00 当日受付 聴講無料  
当館学芸員等が岩手の文化や歴史、自然について解説します。
- \*展覧会関連講座
    - 3月8日 「盛岡竿と盛岡式流し毛鉤～岩手の川と釣り文化～」  
※公益財団法人 水・地域イノベーション財団  
助成事業成果発表・シンポジウム  
講師：田中隆充氏(岩手大学理工学部教授)  
小笠原敏記氏(岩手大学理工学部教授)  
近藤良子(当館学芸員)
    - 3月22日 「遺跡発掘調査のリアル ～工夫・失敗・こぼれ話～」  
講師：高木 晃(当館学芸員)
  - \*4月12日 「岩手と日本の絶滅危惧鳥類」  
講師：高橋雅雄(当館学芸員)
  - \*4月26日 「岩手の絶滅危惧種とネイチャーポジティブ」  
講師：渡辺修二(当館学芸員)
  - \*5月10日 「岩手の絶滅寸前植物」  
講師：鈴木まほろ(当館学芸員)
  - 5月24日 「十和田平安噴火は伝承されたか？ー南部地方の八郎太郎伝説ー」  
講師：丸山浩治(当館学芸員)
  - 6月14日 「考古学者はなぜ墓が好きなのか 一企画展へのはなむけー」  
講師：金子昭彦(当館学芸員)
  - \*6月28日 「死生観について考古学者が知っている二、三の事柄 ー墓・葬送・他界観ー」  
講師：井上雅孝氏(滝沢市埋蔵文化財センター)

### 国際博物館の日

- ◆国際博物館の日記念 県博バックヤードツアー(事前申込制)  
5月17日(日)事前申込(応募者多数の場合は抽選)  
国際博物館の日にちなみ、普段は見られない収蔵庫などを特別にご案内します。いずれかのコースを選んでお申込みください。(各回定員5名)  
自然コース 10:20～11:40  
歴史コース 13:20～14:40  
募集期間：4月14日(火)～4月19日(日)  
応募方法：専用メールアドレスに①参加希望コース、②住所、③参加者全員の氏名、④電話番号を明記の上、送信してください。(詳細はホームページをご覧ください。)

### 第91回 自然観察会

5月16日(土) 9:30～12:00  
「ネイチャーポジティブの可能性を探る：湿地の生き物観察」  
地域協働で保全活動が行われている現場で様々な生き物を観察しながら、ネイチャーポジティブについて一緒に考えましょう。  
講師：当館学芸員  
会場：滝沢市穴口 木賊川遊水地(現地集合・解散) 料金：100円  
対象：一般20名  
参加方法：専用の電子メールアドレスまたはハガキで先着順に受付。詳しくはお問い合わせください。

### 植物園散歩

5月4日(月・祝)、5日(火・祝) 各回10:00～10:30  
学芸員と一緒に春の植物園を歩き、様々な花を観察しましょう。  
ガイド：鈴木まほろ(当館学芸員)  
会場：当館植物園(荒天の場合は中止)  
対象：一般10名程度 料金：無料 参加方法：当日受付

### 週末の催し

- ◆ミュージアムシアター  
毎月第1土曜日 13:30～15:00頃 講堂 当日受付 視聴無料  
○3月7日(実写/93分/一般向け)  
「愛妻物語(1951年新藤兼人監督)」  
○4月4日(実写/95分/一般向け)  
「もう一度(2014年林家たい平 企画・主演)」  
○5月2日(実写/87分/一般向け)  
「一人息子(1963年小津安二郎監督作品)」  
○6月6日(実写/110分/一般向け)  
「マリッジカウンセラー(2023年 出演 渡辺いっけい・松本若菜)」

### ◆チャレンジ! はくぶつかん

- 毎月第2・第3土曜、日曜 小学生向け 随時受付  
チャレンジ! マークをさがして はくぶつかんをたんけん!  
3月14日・15日・20日・21日・22日 テーマ：とび  
4月11日・12日・18日・19日 テーマ：赤(あか)  
5月9日・10日・16日・17日 テーマ：虫(むし)  
6月13日・14日・20日・21日 テーマ：ふわふわ

### ◆たいけん教室～みんなのためそう～(事前申込制)

毎週日曜日 13:00～14:30  
幼児(3歳以上で保護者同伴)・小学生10名程度  
さまざまな遊びやものづくり、実験を体験してみましょう。  
※全プログラム有料です(材料費代/プログラムごと異なります)。  
※予約は専用メール(一度に3名まで)で受け付け、応募多数の場合には抽選を行います。詳細は博物館ホームページをご確認ください。

3月	8日 お絵かきはんこ 15日 化石のレプリカ 22日 天然石のフォトフレーム★	5月	3日 こいのぼりづくり 17日 スライムであそぼう
4月	19日 まが玉アクセサリー	6月	7日 チャグチャグ馬コづくり 21日 土器づくり

★印は午前(10:00～11:30)と午後(13:00～14:30)の2回あります。

### 利用のご案内

- 開館時間 9:30～16:30(入館は16:00まで)
- 休館日 月曜日(月曜が休日の場合は開館、翌平日休館)
- 入館料 一般350(160)円・学生160(80)円・高校生以下無料  
( )内は20名以上の団体割引料金
- ※岩手子育てパスポート所有者で、パスポートに記載のお子様と一緒に来館された場合は、入館料免除となります。
- ※学校教育活動で入館する児童生徒の引率者は、申請により入館料免除となります。※療育手帳、身体障害者手帳、精神障害者保健福祉手帳をお持ちの方、及びその付き添いの方は無料です。

岩手県立博物館だより 第188号 令和8年3月1日発行	編集 岩手県立博物館 〒020-0102 盛岡市上田字松屋敷34 Tel. (019)661-2831 / Fax. (019)665-1214 発行 公益財団法人岩手県文化振興事業団 〒020-0023 盛岡市内丸13-1 Tel. (019)654-2235 / Fax. (019)625-3595
-----------------------------------	---